

Title	『坎曼尔詩箋』辨偽
Sub Title	A study on the authenticity of Kan man er's anthology of Po Chu-i
Author	楊, 鎌(Yang, Lian) 和田, 浩平(Wada, Kohei)
Publisher	三田史学会
Publication year	1994
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.63, No.4 (1994. 8) ,p.27(373)- 55(401)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	付載
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19940800-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔付載〕 『坎曼尔詩箋』 辨偽

本稿は曾て一時期世間を騒がせた『坎曼尔詩箋』の真偽について専門的に考察をしたものである。はじめに、

本稿では『坎曼尔詩箋』の発見、世に知られるようになった経緯などについて振り返る。次に、その真偽について十分に検討する。そして最後に筆者が最近八年間にそれについて行ってきた調査と研究を公表したい。もし本稿の考察過程と結論が読者の予期しないものであったなら、それは決して筆者が故意に注意を喚起したからではない。それは、『坎曼尔詩箋』に関する一切について、いちはやく科学的な考察をすべきであったということであらさまにしているに過ぎないのであり、また、『坎曼尔詩箋』の出現及びその騒動が、我々が身にしみてしっかりと反省すべきものであるということを明白にしているに過ぎないのである。

白詩唐代鈔本について〔付載〕『坎曼尔詩箋』辨偽

楊 鐮 著
和田浩平 訳

上篇 研究史

一九七一年、ちょうど二十年前、北京の故宮で開催された「無産階級文化大革命期間出土文物展覽」において初めて世間の人に公開された二件の貴重文書は、その一つは、「坎曼尔元和十五年（八二〇）抄」と記される唐代の白居易の「賣炭翁」という詩であり、いま一つは、元和十年と注記される三首の唐詩で「紇坎曼尔」と記されるものであった。原詩は次の如くである。

〔憶學字〕 古來漢人爲吾師、爲人學字不倦疲。吾

祖學字十餘載、吾父學字十二載、今吾學之十三載。李杜詩壇吾欣賞、訖今皆通習爲之。

〔教子〕 小子讀書不用心、不知書中有黃金。早

知書中黄金貴、高招明灯念五更。
 「訴豺狼」 東家豺狼惡、食吾餼、飲吾血。五谷未

離場、大布未下机、已非吾所有。有朝
 一日、天崩地裂豺狼死、吾却雲開復見
 天。

二つの文書は郭沫若により『坎曼尔詩箋』と命名された。詩箋を見ると、郭沫若は一九七一年十二月十九日に『坎曼尔詩箋』試探』を書いている（一九七二年四月三十日に又「追記」二篇を書き添える）。この政治的激情に満ちた文章は一九七二年第二期の『文物』に発表されたものであり、又同じ年に出版された『出土文物二三事』という本にも収められる。『坎曼尔詩箋』は一時期世間を騒がせて広く人の知るところとなったのみならず、そのために学術界は長期にわたってその衝撃波の影響を受けたのであった。

この二十年來、『坎曼尔詩箋』は出版物の封面および新聞雑誌に数多く現れ、また小中学校の国語の教科書にも収録された。二十年間、およそ唐詩、民族文学、民族団結の書籍、辞典に関しては、適当な紙数を割り当て、頭揚をはからないものはほとんど無いほどである。唐詩を編集した本の中には、その詩を収録したもの（『唐詩

選』など）もあれば、その写真が掲載されたもの（『唐詩鑑賞辞典』など）もある。孫望の『全唐詩補逸』、童養年の『全唐詩統補遺』は、ともに坎曼尔の三首の詩を全唐詩に見えない逸詩とし、これを書中に編入した。中華書局が『全唐詩外編』を編集した際には、孫・童らが輯めたものに従って、上述の三首の詩を「唐詩」として収録した。文章に至っては、その著述の中に『坎曼尔詩箋』に言及したり例証として引くものがいよいよ多く枚挙に暇がない。

『坎曼尔詩箋』にこのような高い「知名度」がある所以は、郭沫若の類すべきなき影響と関係がある以外に、踏み込んで考えてみると、政治的なものとも必ずや関わりがあるであろう。見落とせない要素としてはまた、それが一九七一年より一九七二年の間に「発見」されたということがある。個々人の体験者は「十年の動乱」に対しては記憶になお新しいところであろう。『坎曼尔詩箋』は現実の政治的需要に全く同調したものである。民族の団結を謳歌し、階級の抑圧を告発し、九世紀の兄弟・民族・人士を作って、このような政治的遠大な見通しをもつことは、確かに甚だ希有なことであった。

二つの『坎曼尔詩箋』の背面には文字もあり、郭沫若

は「アラビア文字或いはウイグル文字」と称している。郭沫若の文章は詩箋を「修正主義に反対する」というその論拠にしているために、ソ連は直ちに反駁し、ソ連の新聞雑誌は文章を掲載して、文書の背面の文字はチャガタイ文字であると指摘した。^①チャガタイ文字は古いウイグル文字で、十三世紀に始まり、今世紀の三十年代になつてようやく使われなくなつたが、その現代ウイグル文字との関係は、ちょうど古代漢語と現代漢語との関係に似ている。このように、その一つの背面は九世紀に書かれたものであり、いま一つの背面は早くてもその四百年の後に書かれたものであるという。この「時間差」はただ歴史の偶然性をもつてしてのみ埋め合わせることができるものである。

とりわけ指摘しておく必要があるのは、歴史学者の張政娘は早くも郭沫若の文章が発表された時に、所謂『坎曼尔詩箋』の真偽について異なる見解を提起していたということである。張政娘は曾て折々の機会に、詩箋は唐代の文書ではないと何度も言明している。その理由は、第一に文書中には五十年代中期になつてからようやく普及した簡体字が、どういふわけかあるためであり、第二に文書のその種の字体は明代の万暦年間以前には現

れるはずがないからであり、第三には「東家」などの語句は唐代には全くありうるはずがないからである。張政娘先生は上述の見解を文章にまとめたわけではなく、主に口頭にて伝えたものであるから、これは限られた範囲内で伝わったものである。

中国の学者が最初に（ただ一度のみであつたが）新聞雑誌に『坎曼尔詩箋』に対して質疑を差し出したのは、筆者の知るところによれば、蕭之興が著した「関于『坎曼尔詩箋』年代的疑問」という文章がこれに該当する。この文章はわずかに一千字少々のものであり、一九八〇年十一月十八日の『光明日報』に発表された。蕭之興は『坎曼尔詩箋』を隈無く否定しているわけではなく、その抄写された年代に対して疑問を投じているにすぎない。蕭之興の指摘は次の如くである。一、詩箋に書かれているのは「唐朝の通常の字体ではない」二、「餽」は「饜」の簡体字と認められるが、饜字の出現はかなり晚いものである。三、「坎曼尔」とは「イスラム教特有の名称」であるが、イスラム教は十世紀後半になつてようやく新疆に伝わり始めた。四、漢文の背後のものはチャガタイ文字であるが、漢文が書かれたのはチャガタイ文字よりも後でなければならぬ。五、九世紀の初めには回紇

(ウイグル) 人はまだ新疆南部には至っていないかった。

様々な原因により、『坎曼尔詩箋』の真偽もまたなお問題とされていなかったのである。八十年代の初め、『郭沫若全集』が編輯されたが、張政娘は再び当時の考古研究所の所長であった夏鼐に対して、『坎曼尔詩箋』は偽であり、『坎曼尔詩箋』試探』は全集に入れるべきではないと言出し、同時に詩箋中の簡体字(「谷」、「壇」など)も抄写して夏鼐に示した。より慎重にとの立場から、郭沫若著作編輯出版委員会は中国社会科学院歴史研究所の黄烈、周自強を任命し新疆に派遣して調査させたが、調査結果は詩箋が偽の文物であると実証できず、そこで郭沫若の文章は全集の歴史編第三卷に収録された。

近年、これらの疑問に対して、続々とその疑問点を分析する文章を書く人が出ている。その中、比較的代表的なものとしては次のものがある。廖沢余の『坎曼尔詩箋』「餽」字辨(『中国語文天地』一九八八年六期)、錢伯泉の『坎曼尔詩箋』新探(『文物』一九八八年十一期)、『坎曼尔詩箋』和吐谷渾人(『新疆日報』一九八九年七月二十二日四版)、『吐谷渾人在西域的歷史—兼談坎曼尔詩箋的族属和價值』(『新疆大学学报』一九九〇年

二期)。錢伯泉はその三篇の文章の中で蕭之興の質疑に対して全面的に答えを与え、また詩箋への新たな見解を提出している。彼の論点の骨子は次の如くである。一、西域民族の習慣では硬筆(葦筆、木筆)を用いて字を書くので、「この種の硬筆を使つて漢字を書けば、必ず筆画が均一になり、全体の形が方形になって、做宋字体に近くなる。」二、簡体字は民間の俗字体であり、今世紀の五十年代に始まったものではない。三、詩箋の作者は「紇坎曼尔」であつて、回紇(ウイグル)人の「坎曼尔」ではなく、吐谷渾族である。錢伯泉は詩箋が唐代の貴重文書であると疑っていないばかりか、これが「吐谷渾文化の結晶である」としている。

この疑問と分析を全体的に見た限りにおいては、所謂硬筆で漢字を書くことと決まつてその形が方形になり、做宋字体に近くなるという見解はもつともらしいが、誤りであり、全く根拠のないものと思われる。先ず、『坎曼尔詩箋』は当然のことながら毛筆によつて書かれたものであつて、しつかり原物を見さえすれば、まったく疑いの余地はない。次に、漢字の最初のものもまた「硬筆」を用いて書かれたものであるが、甲骨文、金文、大篆は「形が方形」という感じはしない。西域の古い文字例え

ば法盧文（カロシティー文字）などは、硬筆を使うにもかかわらず、字体は丸まるとしており、方形らしいところがさらさらしない。万年筆、鉛筆、木炭筆、ボールペン、サインペンなどはいずれも硬筆に属するものであるが、今日の小中学生でも字を書けば必ず「形が方形になり、做宋字体に近くなる」という現象は起こりはしない。どのような字体を書こうとも、それが使用する筆によって左右されてしまうことなどは未だ曾てなかったのである。簡体字に関しては、錢伯泉の分析に基本的には同意する。

坎曼尔というこの名称によって生じる問題に関しては、検討してみるといささか複雑である。坎曼尔とは確かにイスラム文化の人名であり、「月」という意味がある。しかし、馬合木徳・喀什噶里（マハムード・カシユガーリ）の『突厥語大辞典』（十一世紀七十年代に成る）の中には、坎坎曼納尔はイスラム時期以前の人名で、英雄、優れた才能をもつ人という意味が含まれると見える。しかも坎坎曼納尔はまた坎曼尔と訳せる。しかしながら坎曼尔を吐谷渾人と言ってしまうのも、証拠に乏しい。『魏書』には吐谷渾の将帥を紇拔渥と云うところがあり、詩箋では「坎曼尔」と「紇坎曼尔」とに分けてしるすが、

錢伯泉先生は速やかに結論を出して、坎曼尔の姓は紇で、吐谷渾族であるとす。これに先んじて、錢伯泉が已に指摘しているのは、「唐代の元和年間以前に、我が国の少数民族の姓氏の中で、『紇』の字を含み持つものには、紇豆陵、紇奚氏：などがある」、「これらの姓氏はいずれも復音節である」ということであり、すなわちいずれも復姓である。にもかかわらず、この紇拔渥が「復音節」の姓氏ではなく、姓は紇で名は拔渥であるとして証明できようか。よしんば姓が紇であるとしても、吐谷渾に間違いのないのだろうか。それゆえに、坎曼尔の名称の点での蕭之興の質疑と錢伯泉の新論には、いずれもおお検討の余地があると考えられる。

以上は簡単に本稿に先立つ詩箋に対する質疑とその分析について振り返ったものである。筆者は最初郭沫若が下した論断を疑い無く信じていた。八年前、偶然の機会から詩箋の原物を見ることができた。この時より以前には、蕭之興の文章を読んだことがないばかりではなく、詩箋に対しても如何なる疑いも抱いてはいなかった。原物を見た時には、文書の背面の文字は読み比べてみてもチャガタイ文字であると分かった。しかし私の観察によれば、その形跡はチャガタイ文字が書かれた時期

が漢文よりも早いものであったことを明らかに示している。文字の痕跡から見ると、漢字は染み込んだ墨跡にしつかり押し重なっており、チャガタイ文字の跡はうつすらとしてはつきりしない。漢文はつまり筆墨が新しいかに見える。書写の状態から見ると、まさに蕭之興の指摘の如く、チャガタイ文字は右から左に向かつて横書きされている。しかし漢字が紙幅の中央を占めているのに、チャガタイ文字はわきから真つすぐ紙の端にまで至っているのである。

この後またさらに分かったこととして、『坎曼尔詩箋』と同時に米蘭（ミールン）の古城で出土したものがあつた。それにはやはり漢文の詩句が書かれた四つの残紙があるが、筆跡は詩箋と同じであるから、まさに同一人（坎曼尔）が書いたものである。この四つの残紙の背面には吐蕃文字が書かれている。私はその原物を見てはいないが、その凶版は曾て『新疆出土文物』（文物出版社一九七五年版）に収録された。この四つの残紙に書かれているのは『詩経』の中の『伐檀』（二片）、『七月』、杜甫の『兵車行』である。この所謂坎曼尔によつて抄写された四首の詩『伐檀』、『七月』、『兵車行』、『賣炭翁』は、いずれも意外にも一九六〇年より六一年の中学校の国語の教

科書に採録された古詩であり、我々は曾てこれらを暗唱し、空で書いたことがある。唐代の坎曼尔の古詩に対する鑑賞規準が、階級闘争を提唱し、政治規準と芸術規準との統一を強調した五六十年代の過渡期と、こともあろうに完全に一致する。このようなことが有り得ることであろうか。

はじめに抱いた疑問が契機となつて、『坎曼尔詩箋』へのあらゆる考察と調査を行つてきたその長い過程の中で、結論はいよいよ明白となつた。

『坎曼尔詩箋』、それは本物ではあり得ないということ、内容より形式にいたるまで、すべてに「現代」の意識が浸透しており、階級闘争という烙印が押されている。それは当然のことながら本物ではない。でなければ一連の歴史というものは書き換えられねばならないことになる。

中篇 質疑

真摯にそして深く掘り下げて研究をするならば、『坎曼尔詩箋』の出土、引きはがし、発表、その内容、書法、書写などの一切の関わりのある端々には、いずれも疑わしさが有り、詩箋自体がそのまま一つの謎である。

先ず、所謂『坎曼尔詩箋』は「新疆ウイグル自治区

の博物館の職員が一九五九年十月に、若羌県のミールン古城の住居址を調査中に発見したものである」とされるが、これは明らかに全く根拠がないものである。この発言は郭沫若の『坎曼尔詩箋』試探』に最初に見えたものであり、新疆の博物館が提供したものであったが、これまでのところ、新聞や雑誌で文章を掲載してこの発言に対して修正を示したことはない。しかしこの発言は明らかに成り立たない。

一九五九年十月、新疆博物館は一隊の文物工作班を南疆庫爾勒專區（今は合併されて巴音郭楞自治州となる）に派遣して文物の分布調査をさせた。参加者は彭念聰及び小王（名前は不明）である。彼らは現地のウイグル族の参加と援助の下、ミールン古城で十日間の調査を行った。その経過は、彭念聰によって書かれた『若羌県米蘭新發現的文物』に見え、『文物』一九六〇年八一九期合併号に掲載された。この文章は発掘概報であって、その全文は一千字にも満たない。が、言葉は簡潔にして意は尽くされており、叙述も正確にして明晰である。この文章によれば、当時九つの住居址を調査したところ、そのうちの六号からは古い民族の文字が書かれた残紙十八片が出土し、七号からは古い民族の文字が書かれた木簡、

残紙片及び木牘ら全部で一百六件が出土し、八号からは古い民族の文字が書かれた木簡及び紙片全部で十三件が出土し、九号からのみ比較的完全な文書一葉が出土したという。六、七、八号より出土した紙片については筆者は曾て見たことがあり、小さいものは硬貨よりやや大きく、大きいものでも手のひらの大きさぐらいであり、当然のことながら『坎曼尔詩箋』ではあり得ない。ただ九号より出土したその文書のみこれにやや近いのであるが、彭念聰の記述によれば、その実態は、「字体は殊の外整っており、上面にはさらに四つの真つ赤な指紋印がある。紙の長さ二七センチメートル、幅二一センチメートル。これは当時契約などにもちいたものかもしれない、さらに研究されてしかるべきである」という。このうち、「字体は殊の外整っており」という記述が詩箋と似ているところであるが、その他はまったく一致しない。二つの詩箋は各々二二×一一・五センチメートル、二四・五×一一・五センチメートルである。彭氏の文章はこの一文書には如何なる文字が書かれているとは言及していないのであるが、文意よりすれば、それは古い民族の文字によって書かれているはずである。しかももしそれが本当に詩箋であるならば、当時それはびたりと一致するも

のであるが、両面に古い民族の文字が書かれた文書にすぎず、詩箋の字体が整った漢文の詩篇はまだはがされてはいなかったのである。かくしてこの一九五九年にミールン古城で出土した文物については、その中の全ての木簡及び木牘が、王堯、陳踐によって解説されたが、所謂「古い民族の文字」とはいずれも吐蕃文字（古いチベット文字）であり、その内容は『吐蕃簡牘綜録』という本に掲載された。

ミールン古城は元来九世紀のチベット族の城塞であつて、その出土文物の主要なものとは三つある。一、英国籍のハンガリー人スタインが一九〇七年に得たもの。二、新疆博物館が一九五九年に得たもの。三、新疆博物館が一九七三年より一九七四年に得たもの。しかしながら、坎曼尔の自作の三首の詩、書いたものとしては四首の詩、これらを除くと、その他のミールンで出土した文物、文書は全て吐蕃人の遺物である。しかもミールン古城は九世紀以後は荒野の廢墟と化したのであつて、人は二度とこの地に居住することは無かつた。考えてみてほしい、この二つの詩箋がもし本当に唐代にこの地に遺された文書であるとしたら、どうして最も早くて十三世紀、つまり四百年の後に出現したというチャガタイ文字が書ける

であろうか。

我々の認識によれば、『坎曼尔詩箋』が疑い無く本物であると認めた前提の下で、若干の同志はその出土状況に對してある程度の修正或いは解説を行つてきた。その中の一つの見解は、前に触れたものである。つまり、『兵車行』、『七月』、『伐檀』が書かれた残紙、その背後のものは吐蕃文字であるために、詩箋もやはりミールンに出土した九世紀の文物であり、詩箋の背面のチャガタイ文字は即ちその後の人が或る全く偶然の状況の下で書いたものであるということ。いま一つの見解は、詩箋は当然本物であるが、出土地点が間違つているといふ可能性があり、喀什（カシュガル）付近で出土したものであろうということ。前説は詩箋が九世紀の文書であるという説を強く支持するものであり、後説は、即ち一歩前進をはかろうとして、その背面にチャガタイ文字があるというこの常識に悖る現象のために、合理的な解釈を見いだしたものである。だが、見落とせない点は、この二つの見解は矛盾しているということである。いささかの疑問の余地も無いことは、別の四件の坎曼尔が書いた詩箋の背後のものは吐蕃文字であるから、この詩箋は、背後に書かれたものがチャガタイ文字である詩箋と同様に同

一人物によって書かれたものでもなければ、同一地点に出土したものでも決してありえないということである。

次に、所謂詩箋が発見された時には、それが一緒に張り付いている状態だったので、両面に古い民族の文字が書かれた一文書であると思われされたが、「一九六二年に文物を整理した際、ようやく二件を引きはがし、はりついていた別の両面に漢文の抄録が書かれているのを発見したが、これは坎曼尔が書写したものである」（郭沫若『坎曼尔詩箋』試探）などという記述は全くあり得ないことである。二つの文書は張り付いていたために、長い間一つの文書であると思われされているが、とすれば以下の最低限の条件を備えていなければならぬ。一、二つの文書には少なくとも三分の一は左右全く重なり合える縁がなければならない。二、二つの文書は合わせてみて、字を書いた表面が一つ（多くて二つ）でできる。しかし『坎曼尔詩箋』はどちらの条件をも備えていない。

詩箋は二葉の大きさが全く一致するという最良の紙ではなく、また、二葉は破損したもので大きさが一様ではないという文書であるが、この点はとりわけ重要である。遺址の中で長い間合わさって一つになっており、同じ源

の自然の力もしくは人為的作用が加わったために、二葉の残缺には必然的に一致する箇所ができ、重なって一つになり得たのである。それはまさに、大西洋の両岸（ヨーロッパ、アフリカ大陸の西海岸とアメリカ大陸の東海岸）に重なり合える辺域があつて、つなぎ合わせてすつかり一体となり得るために、ドイツの学者ウエーゲナーが今世紀初頭に提出した「大陸漂移」という学説のようなものである。

ただ目で観察するだけでは決して重なり合う縁があるか否かという根拠とはなり得ない。我々は原物を伸縮自在できる複写機を利用して、『坎曼尔詩箋』の写真をもとの寸法になるまで引き伸ばし、彫刻刀でそれを切り落とすとして、二つの文書を模造したが、この二つの原寸大の複製品を、どんなにつなぎ合わせたところで、一センチメートルでも重なり合う縁は見つからなかった。

より説得力をもつこととしては、この二つの文書を改めて合わせて一つにすると、それらの向かい合った位置を如何に動かそうとも、『賣炭翁』が抄写された文書は、坎曼尔自作の詩三首が書かれた文書上の漢字を完全に覆い尽くすことはできない、という点がある。そのようにしてみると、やや判断にたけた人でさえあるなら、それ

らを誤つて一の文書であるなどとしなないであろう。言い方を換えると、所謂る合わさつて一つになつたという、この両面に古い民族の文字（実際にはチャガタイ文字）が書かれた詩箋は、三つの表面（その中の二つには、多少ふぞろいで、はつきりしているものとそうでないものとが混じつたチャガタイ文字が書かれており、いま一つには整つた漢字が書かれている）があるという状況の下で、一枚の紙として発掘（或いは採集）、登記、箱詰め、倉庫入れ、修正がなされてきたのである。これはできることであろうか。

我々は、所謂る坎曼尔自作の詩三首の内容に対して、必要な研究と分析を更に進め、それらが唐の憲宗の元和年間に書けたか否かということについて検討してみることにしよう。

詩箋の「憶學字」の第一句は「古來漢人爲吾師」であり、ここの「漢人」とは漢族の人を指す。しかし問題は、これ以外には宋代以前で西域の各民族が漢族の人を「漢人」と称する例を他に見いだせないという点にある。漢族の人が漢人と自称するのは漢代に始まる。古代の西域紀行文（例えば『法顯伝』、『大唐西域記』）の中には、「漢地」、「漢軍」などの呼称があり、おおよそ『坎曼尔

詩箋』と同時代の敦煌文書『往五天竺伝』の中には、「漢人」という語彙は見えないが、「漢国」、「漢名」、「漢軍」、「漢僧」などの語彙は多く見える。だが西域の各民族及び外国人は漢人という言い方で漢族を呼ばない。馮承鈞はその著『元代的几个南家台』（『西域南海史地考証論著彙輯』に見える）の中で指摘している。

外国人が中国人を呼ぶ名称は、最も古くて支那 (Cina) と言う。その後は「adgar」と言い、長春真人の『西遊記』ではその音を桃花石と音訳している。伯希和 (ポール・ペリオ) はこれを拓跋の音訳ではないかと考えている (唐一家の説はそうではない)。最も後のものは契丹 (Khitai) と言う。全部で三回変わったが、このことは世間の人を知っていることである。

兄弟民族の文書の中で、我々は宋以前に漢族を称して「漢人」という状況を見いだせない。漢代の亀兹国の文物である『劉平国作亭誦』の刻石が、清朝の光緒三年 (二八七七) に発見され、その誦文に云う。

龜兹左將軍劉平国、以七月廿六日發家從秦人孟伯山、狄虎賁、趙当卑、万阿羌、石当卑、程阿羌等六人共来做列亭

ここでは「秦人」という言い方で漢族の人を呼んでい
る。

尼雅（ニヤ）で出土したカロシティー文字の文書は、
曾て王広智によって漢語に訳されたが、その新疆民族研
究所の印刷本が、現今『尼雅考古資料』に収められてい
る。王広智の訳文中には何度も「漢人」と出てくるが、
原書のローマ字の書き写しは、いずれも Cina であつて、
正確に訳せばまさに秦人であろう。

敦煌文書中には若干の吐蕃の歴史に関する文書がある
が、その中の『大事紀年』は唐の高宗の永徽元年（六五
〇）に始まり、唐の代宗の広徳元年（七六三）に終わっ
ている。これは古いチベット文字によって書かれた歴史
書である。この書では漢族の人を称していずれも「唐
人」と言っており、虎年（唐の肅宗の宝応元年・七六
二）の紀事においては「以唐人歳輸之絹繪、分賜各地千
戸長以上官員」と言う。

我々としては、西域各民族が漢族を漢人と称するとい
うこの言い方が現れるのはかなり晩く、唐代にこの先例
がないばかりではなく、それがひろく各民族がこぞつて
用いるようになったのは、まさに清朝の乾隆年間以後の
ことであり、清朝が新疆を統一した後に各地に漢域

（「楊格薩依」）を築いたことと必ずや関係があるであ
らう、という考えをもっている。坎曼尔が漢族を「漢人」
と称するのは、彼が回紇（ウイグル族）でも、また吐谷
渾^③でもなく、更に唐代に生きていたはずがないといふこ
とを示すにすぎないのである。

郭沫若は現代中国の最も重要な文学者、歴史学者、考
古学者の一人であり、彼は一九七一年に出版されたその
専門的著書『李白与杜甫』において、唐代の大詩人李白、
杜甫に対して、当然のことながらかなりの研究を残して
いる。坎曼尔は『憶學字』の中で「李杜詩壇吾欣賞」と
云うが、これはもとより詩箋が偽作であるという痕跡の
最も明白な一句である。が、郭沫若は逆にこのために
「元和十年は宝応元年の李白の没後五十三年、大暦五年
の杜甫の没後より四十五年である。そして李杜の詩歌は
すでに西域の兄弟民族の鑑賞するところであり、文化の
普及は広く隅々に行き渡っているが、これは大いに目を
見張るほどの驚きではあるまいか」と書き記している。
この句に対して疑いを示していないばかりか、大いに称
賛をしているのである。

唐代の文学を研究している人なら誰でも知っていて、
もともと特に重点的に指摘するまでもない一つの事実と

して、李杜の在世時、当時の人は李杜（とりわけ杜甫）に對して、今日ほどには特に重視していなかつたということがある。李杜を以て唐詩の最高傑作の代表とし、唐詩の代名詞とするのは、李杜が世を去ることかなり久しくたつてからのことである。この点については、唐人が唐詩を選んだ形に極めて明瞭に反映されている。

盛唐に成つた二つの權威ある総集——『河岳英靈集』『国秀集』——は、いずれも杜甫の詩を一首も収めない。

前者は李白の詩十三首を収めているが、編者の推奨するのは常建を以て代表的な詩風としている。『中興間氣集』が選んだものは至徳より大暦年間に至る詩であり、その編者の高仲武は李杜の詩を一首もとっていない。中唐の姚合（七七五年に生まれ、八五四年以後に卒す、坎曼尔と同時代）は『極玄集』を編輯したが、王維に始まり戴叔倫に終わつていて、これもまた李杜の詩を一首も収めていない。晩唐の韋莊が編した『又玄集』（唐の昭宗の光化三年・九〇〇に成る）に至つて、ようやく初めて李白、杜甫を以て詩人の代表的なものとし、巻の端に置いた。これはちょうど鍾嶸が彼の『詩品』の中で、陶淵明をただ中品に列したようなもので、李杜（とりわけ杜甫）が人々に広く受け入れられるためには、比較と思考

というこのやや長い一つの段階を通り抜けなければならなかつた。

唐代の詩文作家の中で李杜が唐詩の代表的なものであるとしたのは、白居易と韓愈によつて最初に言い出されたことであるが、二人はともに坎曼尔と同時代の人である。白居易は『與元九書』の中で「詩之豪者、世称李杜」と云う。この文章は元和十年に書かれたもので、まさに詩箋が書かれた時期と同じである。韓愈は『薦士』という詩の中で、「国朝盛文章、子昂始高蹈。勃興得李杜、万類困陵暴。」と云う。この詩は錢仲聯の『韓昌黎詩繫年集釋』では元和元年（八〇六）九月の作とされる。韓愈の『醉留東野』、『調張籍』などの詩でもまた李杜を併称している。後者の詩は一般には元和十一年以後に書かれたものとされる。

指摘しておかなければならないのは、李杜をもつて併称することは、李白、杜甫が在世していた時にもあったということである。例えば元稹の『杜工部墓誌銘』（元和八年の作）の中では「則詩人已来、未有如子美者。時山東李白亦以奇文取称、時人謂之曰李杜。」と云う。しかし併称することは唐人の場合よくあることであり、その使用はかなり一般的である。杜甫は詩中で自ら「李杜

「李」とは李衛を指している。そして李(白)杜(甫)を唐詩の最高水準に達した代表格とすることは、坎曼尔の時代にあつては、個々の有識の士のみが唱道するところであつて、一般の人々の受け止め方とはかなり異なつていたのである。坎曼尔が詩箋を書いた時には、新疆東部は既に吐蕃が占拠しており、中原と西域との交通が遮断されてから数十年という時間が流れていて、改元の消息さえすぐさま西域に伝わらなかつた。坎曼尔自身は閉ざされた僻遠のミールンにあつて、どうしてこのような驚くべき遠見卓識を持つて李杜を唐代の詩壇の代表的な者とすることができるであらうか。

中国社会科学院計算機室はすでに全ての唐詩(『全唐詩』及び『全唐詩外編』を包括する)をコンピューターに入力している。一九八九年九月、筆者はコンピューターを利用して唐詩中の「李杜」、「詩壇」、「欣賞」、「東家」などの四つの語句について検索するように求めた。「李杜」に関するその基本的な内容については、すでに上述における検討過程で扱った。以下においては、「詩壇」、「欣賞」、「東家」という三つの語句の検索結果について専門的な分析を試みたい。

「詩壇」についての検索結果は、「外編下冊三十卷四六六頁十三行に見える」というものであつた。即ち坎曼尔の『憶學字』という詩に見えるものである。唐詩の中では「詩壇」というこの言い方が無いことがわかる。

「欣賞」についての検索結果は、『憶學字』以外にも他に一例があつた。孟浩然の『同盧明府早秋宴張郎中海亭』がそれで、その詩は次の如く云う。

側听弦歌宰、文書游夏徒。故園欣賞竹、爲邑幸來蘇。華省會聯事、仙丹復欲俱。欲知臨泛久、荷露漸成珠。

第二聯についての具体的な分析をしていた時に、その「欣賞」に含まれている意味と「李杜詩壇吾欣賞」の中の「欣賞」とでは意味が異なると分かつた。後者の「欣賞」は現代中国語の用法と全く同じであるが、「故園欣賞竹」は絶対にそのようなものではない。

「故園欣賞竹、爲邑幸來蘇」は五言律詩の一つの対句であつて、上下の句の句形式は対称的である。下句の「來蘇」は「後來其蘇」の省略語句である。この語は『尚書・商書』に典故があり、殷の湯王が征伐した土地に仁政を大いに施したことを表しているが、後に君主が巡幸に出たり民とともに休むことを表すようになり、唐詩中によく見かける典故である。例えば、陸敬には「來

蘇竹聖德」(『全唐詩』四五五頁) という句があり、虞世南には「順動悦來蘇」(『全唐詩』四七六頁) という句がある。孟浩然のこの詩の「來蘇」は民とともに休むことを示している。このように、上述の対句は分解すると「故園―欣―賞竹、爲邑―幸―來蘇」となるべきものである。言葉を換えていえば、上句は「賞竹」を以て対となり、「來蘇」と呼応する。「欣」は欣然の省略語であり、そこに含まれる意味は現代中国語及び『憶學字』の中の「欣然」とは全く異なっている。唐詩の中にもこの語句はないのである。

「東家」についての事情はいささか複雑である。『坎曼尔詩箋』中の「東家」は資産家(小作人、雇われ農民が従事する主人)という意味である。唐詩中では「東家」という語がまれにしか見られないわけでもないが、それらを一一つ一つ検索して探し出し、それらもつ意味を今一度識別しなおし、唐人が「東家」という語の解釈を資産家という意味でとらえているか否かについて見てみなければならぬ。「東家」の語句は使用頻度は相当高く、紙数の制限があるために、それらの例を一々列挙することはできないが、ここではその分析結果を幾分か摘まんで紹介するに止めたい。

唐詩中の「東家女」(「東家」と略すこともある)は、もともと宋玉の『登徒子好色賦』に出典があり、実際には隣家の美しい娘、或いはただ美しい娘で品行方正ではない女のことを指し示す。唐詩中の「東家丘」(「東家」或いは「東丘」と略すこともある)は、孔子が魯にいたとき、西の隣家の人は彼がどういう人であるかを知らないで、ただ「我が東家の丘」とのみ云ったというこの伝説に典故がある。これは『文選』卷四十一『爲曹洪與魏文帝書』の唐人の張銑の注に見える。才能がありながら不遇にして、軽視を受けるということを比喩的に表したもので、これもまた隣家の意味そのままである。晩唐の温庭筠の『常林歡』に「東家呃啞鷄鳴早」とあり、この「東家」は隱居地の隣人或いは寄寓している家の主人を指すが、この用法は東晋の謝安が東山に隱居していたという典故ときつと関係があるのだろう。要するに、唐代の「東家」には隣人、女性、隱居などの隠れたニュアンスが大かた含まれていたが、『訴豺狼』以外には一例も資産家という意味を含むものがないのである。

上に述べたことをまとめると、『坎曼尔詩箋』を書くことができたのは、唐王朝の元和年間に生きていた人では断じてないということである。そこに見える語句が唐

人が書けたものではないという点を除いても、元和十年前後の中原と西域との交通がつとに遮断されていて不通であったということが更に有力な一つの反証となっている。

「シルクロード」は中原と西域の物質文明と精神文明の交流を一つにつなぐ古い路であるが、大きく言った場合この言い方は正確である。だが、もし「シルクロード」の歴史について広い視野から考察と研究をするならば、この中原と西域との交通命脈は順調に往来がなされていたわけではないことがわかる。坎曼尔の父祖が漢字を学んでから、坎曼尔が『憶學字』などの三首の詩を書き『賣炭翁』を抄出するに至るまでの時期は、まさに「シルクロード」が切断され、中原の消息や文化が順調にしてすみやかに西域に伝わらないという特異な歴史的時期にあったのである。しかも、坎曼尔が詩中において東家を告発し子供に読書を教えていた時は、回紇（ウイグル）が河西及び新疆南部に入っていたわけではなく、その集落は遙か崑崙川（今の蒙古人民共和国の鄂爾渾〈アルゲン〉河流域）のほとりに旅游していた。

唐の玄宗の天宝末年に「安史の乱」が突如起こってからは、以後の「シルクロード」の要害―河西回廊―は吐

蕃が占拠するところとなり、西域と唐朝との古くからの一切の關係を切断してしまった。

フランスの中国学者戴密微（デュミエーヴィル）の名著『吐蕃僧諍記』（即ち『拉薩僧諍記』）の第二章「資料疏義」では、八世紀後半期の河西回廊の形勢についてかなり詳細な考証をしている。デュミエーヴィルの指摘は次の如くである。河西回廊の東端の要衝である涼州は唐の代宗の広徳二年（七六四）に吐蕃によって攻め落とされ、西端の西域に入るための要害哈密（ハミ）は唐の徳宗の建中二年（七八一）に陥落した。吐蕃の大軍に對峙して、唐朝の伊州刺史袁光庭はハミを苦難のなかで守つたが、数年後、糧は尽き援軍も絶え、自らの手で妻と娘とを殺し、自刎して果てた。涼州とハミを攻め落とすと、吐蕃は中原と西域との交通を切断してしまった。唐代の河西回廊における最後の地方長官、つまり河西節度使にして敦煌刺史でもあった周鼎は、吐蕃が重圍する中、唐の代宗の大曆十二年（七七七）前後に部下の將にその地位を奪われた。又十年間は苦しみながら守り続けたが、その後は、敦煌も吐蕃に攻め落とされ、そのまま唐の宣宗の大中三年（八四九）の春に至った。そして唐代の政令はようやく敦煌に再び行われている。

このような背景の下で、唐代の西域にわずかに存した拠点は孤立絶域の飛び地と化したのである。或る比較的長い期間の中で、朝廷は安西の四つの藩鎮及び伊州、北庭の節度使の存亡さえ知らなかった。また、塞外に遮断された唐の四つの藩鎮は郭昕を後に残し、伊西北庭節度使曹令忠らが幾度も人を派遣して朝廷との連絡に画策したが、全てが半ばにして実らなかった。そしてそのまま建中二年に至っている。このころ西域の使者はようやく回紇地区（今のモンゴル草原）より迂回して長安に辿り着き、塞外の実情を報告している。八世紀の六十年代から、河西、隴右に踏み止まった吐蕃が、西域に進攻を開始した。そしてミールランは吐蕃にとつてまさに天山以南の重要な中枢の地であった。このことは、ちょうど坎曼尔の祖父の「学字」の時期に当たっている。

天宝十載（七五二）、京兆の人が、朝廷の命を奉じて唐朝の使節に付随し罽賓（今のカシミール）に赴いた。彼は病気になる と 犍陀羅国に滞留し、後にこの地で出家した。法名は悟空。三十余年の後、悟空は西域に道を求め経典を齎与するために帰国の途についた。疏勒、于闐を通っているが、タリムの東端はすでに吐蕃が占拠していたために、彼は且末、若羌を避け、又迂回してタクラ

マカン砂漠の北沿の安西（今の庫車）に至っている。この後、彼は天山の氷壁を越え天山北麓の北庭（今の吉木薩爾）に至っている。北庭にあつては、時まさに朝廷より派遣された四鎮北庭宣慰使の段明秀がこの地に至り、唐朝の兵士と人民に朝廷の意向を授かつてきたところであつた。段明秀も同じように元来の「シルクロード」なら必ず通らなければならぬ河西、隴右を避け、艱難の思いをし、回紇地区に途を取つてようやく西域に辿り着いたのだつた。貞元五年（七八九）、悟空は北庭を離れ、北庭より派遣された中央への報告を義務とする奏事官で、且つ節度押衙でもあつた牛昕等とともに、連れ立って京師にもどつた。「當に沙河不通のために、道を回鶻路に取る」というこの時、蒙古草原を占拠していた回鶻（即ち回紇）はまだ仏教を信仰していたわけではなかつた。妨げとなるものを軽減するために、悟空は痛切の思いで印度より将来した梵語で書かれた経典を、全て北庭の龍興寺に残したのである。「天竺」より経典を求めた僧侶について言えば、途中で経典を捨てなければ間違ひなく生命を落とすであろう。悟空がこの選択を下した所以は、河西が全く遮断され、中原と西域がつとにその如何なる経済文化の交流もできなくなつていたことと、当然無関

係ではないであろう。悟空の上述の経歴は圓照が書いた『大唐貞元新譯十地等經記』に全て記載されている。文献の中には、又その題を『悟空居入竺記』とするものもある。それはちょうど坎曼尔の父が在世していた「學字十二載」という時期のことであった。

これ以後、唐朝は西域における飛び地の一つ一つの要害を失ったが、回紇は蒙古草原より西南に、吐蕃は西北に向かつて発展して西域における政治の真空状態を埋め、天山以南のタリム地区は吐蕃の占拠するところとなった。結局、唐代のタリム地区の変化は、回紇と吐蕃の勢力の消長に過ぎないのである。

このような歴史的背景の下では、坎曼尔が「通習」「李杜詩壇」「學字十三載」というような条件を持ち得たと、どうして想像できるであろう。また、坎曼尔にはこのようなはずば抜けた先見の明と鑑賞能力とがあつて、彼は、意外にも「卓越」して李白杜甫を唐詩の最高水準に達した代表的なものと考え、白居易が元和四年に書いたという『賣炭翁』を元和十五年に自らの手で書き留める、こんなことがどうしてできようか。いささかの疑問の余地が無いことは、白居易の在世時に、その詩は新羅・日本には伝わったが、その時に西域には伝わりようが無い

かつたということである。

ここまで書いてきて、我々は実際に言うべきことをすべてはつきりと述べてきた。『坎曼尔詩箋』の出現は、一連の既成の定説、筋道の明快な問題をして疑わしき点を多発させた。もしそれらが成立することになれば、多くのことが順序次第が逆転するという無分別を引き起こすことになる。詩箋の疑問点の分析を手掛けた人が考えたことがあるかどうかは知らないが、その疑問に対して答えを与えるについては、まだ最も簡単にして明瞭な活路があるのである。つまり、詩箋自体における真偽がそのまま疑問を解決するための鍵となっているのである。

下篇 掲密

一九八七年より筆者は、『坎曼尔詩箋』が発見され、またそれが発表されてからという事後に関わる状況について調査を行ってきた。抽象的な考察をすると同時に、四度にわたって遠くウルムチに赴き、具体的な調査を進めた理由、その主な原因は、我々がそれを理論の面から否定することに不満であり、また、それが偽造品であるという直接の証拠を捜し出して、一つの終止符を以て多

くの疑問符に換えなければならぬからであった。いかなる角度から言っても、我々がたずさわる調査は、十分必要であるし、それによって我々は繰り返し執拗に疑問点を提出できるばかりでなく、『坎曼尔詩箋』の実際の「作者」を探り当て、それが、いつ、どこで、誰によって書かれたものであるかを明らかにできるのである。

一、詩箋発見、その経過の調査

我々の調査は、一九五九年十月にミーランの古城を発掘した主宰者である彭念聡が詩箋の発見者であると自任していないという点について実証する。彼はその年の事情を詳細に説明した。ミーランでの作業は順調に進んだわけではなく、準備が不十分で、また、この地で雇われたウイグル族の作業員に中国語を理解する人がいなかったために、作業は十分に繰り広げられなかった。得た文物にはその場で一律に番号が付けられ、彼の手で梱包と箱詰めがなされ、博物館に運ばれた。箱詰めされてからは、この文物に二度と触ることはなかった。翌年彭念聡は下放されて瑪納斯県に至り、一九六二年にはウルムチに戻り、一九六三年には自治区の新華書店に配属されて、その仕事が今日まで続いている。

「文化大革命」の時、博物館の保管班の責任者Sは彭⁽⁴⁾

念聡にミーラン発掘時の最初の記録（例えば、平面図、ノート等）を求めたが、彼はこれらの資料を残していなかった。郭沫若は『坎曼尔詩箋』試探を發表した後、彭念聡を博物館に戻し、ミーランの作業事情について回想させた。彭念聡の態度は一貫して、もしその年のあの文物の入庫出入帳に記録があるならば、あの詩箋はミーランで出土したものであり、記録がなければそうではない、というものだった。

入庫登記帳に詩箋はあったのであろうか。このことに関して我々が行った調査は『坎曼尔詩箋』の最初の入庫記録は全く存在しないということを実証するものである。現在、入庫登記表上の七八五三号の文物（坎曼尔自作の詩）及び七八五四号の文物（『賣炭翁』抄出文書）は七十年代初期に補充されたもので、一九五九年に倉庫に入られたミーラン出土の文物と一緒に登記されたものではない。若干ページが離れているばかりでなく、付けられた番号も繋がらない。所謂出土時に合わさって一件になっていた詩箋は、こともあろうに入庫登記がなされない状態で博物館に出現したものである。しかも、一九五九年に誤って一件の文物と見做されて倉庫に入れられた（一九六二年によくはがされた）ために、あった

としても、一つの番号で、一件の文書であるにすぎないのに、どうして登記が二つの番号になり得たのであろうか。よしんば詩箋が実際にミールンに出土したとしても、それは必然的に一連の特殊性をもっていなければならぬわけであるが、そのために発掘者や倉庫管理員は、それを発見し、包装を施し、精査をして倉庫に入れた時点で都合よく必要な登記をするのを忘れてしまったという。このような確率はいったい高いものだろうか。入庫登記と比較してみると、それは世の人に知られた経緯と同様に意味深長である。

元の新疆博物館の要員であった賈応逸の説明によれば、詩箋の正式の出現経緯は次の如くである。

林彪が「第一号指令」を發布した後、戦争の準備のために「三線」に文物を疎開させた。私と沙比提、L等の数人は、博物館の倉庫で一、二級の文物を選び出し、若羌へ送る準備をした。

この時Lは、ミールンで出土した文物には、唐詩が書かれたものがあり、これを重点的に移すべきであると言い出した。「物はどこにあったのだろう」我々はこの時より前には、この文物の存在を聞いたこともなければ、見たこともなかった。Lは我々を

つれて倉庫保管班の主任のSに会いに行き、文書が置かれた戸棚を見つけたが、どうしてもその鍵を探し出すことができず、戸棚の鍵をこじ開けた。その場にいたのは、私、沙比提、そしてLである。文書を取り出してみると、果たして唐人が書いた詩があり、別の小さな幾片かには、『詩経』が書かれていて、「七月流火、九月授衣」と記されていた。

後に、陳婉儀によって、文物は護送されて若羌に至った。天気が非常に暑かったために、樟脳は全てとけてしまっていた。戦争の雲行きもさほどひろがりを見せないとわかり、それはウルムチに送り返された。

賈応逸の回想は貴重な第一級の資料である。その中で注意に値する箇所が二つある。その一つは、最初に証人がその場に居合わせた状況の下で文書を取り出した時、幾片かの小紙（『詩経』、『兵車行』）と詩箋は一緒に置かれていたと、彼女が証明していること。二つ目は、当時その場にいたのは、L、S以外にも彼女と沙比提がいたと、彼女が言っているということ。だが、沙比提に調査のことをもちだした時、彼は、北京で開催された出土文物展覧会の前には、所謂「坎曼尔詩箋」の存在を知ら

なかつたと、指摘している。我々の分析によれば、この二つの言い方は矛盾するわけではない。沙比提は曾てLに従つて数件の文書を見に行ったことがあるが、彼は当時それを『坎曼尔詩箋』に結び付けなかつたのである。

『坎曼尔詩箋』試探』では、詩箋が発見された時には、詩箋は張り付いて一つになっていて、一九六二年に至つて「文物を調査した時、ようやく二つの抄出文書をはがし、張り付けられた別の両面に漢文の抄録があるのを発見した」と云う。この言い方は、新疆博物館が与えたものであり、しかも郭氏の文章が書かれた後に、博物館に送り届けられて、皆に意見を求めているのである。(一九八八年十二月七日の李遇春との談話に據る)

所謂る引きはがしは、当時の博物館の保管班の主任であつたSがしたものである。二度目にSを訪問した時、彼は関係のある背景について説明した。Sの話はこうである。「私は中学校の教養程度しかないものであり、一九五六年には辺境支援の人員だったが、この地にいたるや別れて博物館の所屬となつた。六〇年の下半期には保管係(後の保管班)に転勤になり副係長に任ぜられた。着任後、私は倉庫の整理を始めた。私は第八保管班の責任者であり、倉庫は比較的乱雑であつた。おそらく六二

年であつたと思うが、ミーランで出土した文物の箱の中に、一つの文書で両面には民族の文字が書かれていたものを見つけた。私はそれを日光に照らしてみると、文書の中にまだ文字があるのを発見した。そこで私はそれを水で湿らせて引きはがしてみた。」

Sのその後の経歴は、一九六三年に新疆南部に行き社会主義教育に参加、一九六六年に元の機関にもどり、一九七〇年に博物館から転勤になる、というものであつた。見たところ、詩箋は引きはがされてから後は、別に重視されていなかつたようであり、そこそこにくぶん機密的な感触さえするものであつた。承知できることは、詩箋が一級文物となつて若羌に送られる以前には、ただLとSのみがその存在を知つていて、またそれを見たことがあるという点である。

我々は詩箋に関する状況を以下の如く整理する。

一九五九年十月、ミーランで発見。(この点を証明できざる如何なる第一級資料もない)

一九六二年前後、Sが引きはがして、詩箋を発見した。(Sが自分で述べただけで、証拠があるわけではない)

そのまま一九六九年十月十八日に至り、所謂る「林副主席の第一号指令」が発せられて後に、ウルムチで戦争

の準備と文物の疏開が行われた時、ようやくしによって初めてこの文物の存在が公に言い出され、また賈応逸等の人が詩箋を目にしている。(この年の戦争の準備と疎開は突然行われたものであり、そのためにしは必然的にいち早くその存在を知ったのである。)

「戦争への備え」という風潮も無くなり、詩箋は疎開された文物に付随してウルムチに再び送り返されたが、この後、詩箋は新疆自治区展覽館の二階の展示室に展示されたことがある。(この点は、李遇春が面談で話したものである。李遇春の話は次の如くである。「文化大革命以後、博物館は一時放置されていたが、我々は引き続き展覽館に行って仕事をした。私は展覽館の二階の展示室で初めて詩箋を目にした。私は『これはどこから来たものか』と問うと、博物館から持って来たものであるという。私は何故今まで聞いたこともなければ、見たこともなかったのだろうかと、とても奇妙に思った。後に北京で展覽が行われ、北京に送られた。』)

詩箋が北京に送られて展覽会に陳列された経緯に関しては、調査によれば次の如くである。北京は各省に重要文物を運んで展示するように要望し、新疆では沙比提等のの人によって先ず一連のものが送られた。沙比提が北京

にいた際、博物館の林副才の長距離電話を受けた。その話は、また数件のとても重要な文物を発見したということであった。この後、軍の代表であった博物館の王順徳(女)によってこの数件の重要文物(詩箋を含む)は北京まで携帯された。先ずこの時に文物作業の責任者であった王治秋が目を通し、又数人の専門家にも見てもらって、そしてすぐに郭沫若に送り届けられた。郭沫若は詩箋の発見過程を知ろうとしたが、沙比提にもはつきりわからず、再び長距離電話を新疆にしたのだった。

だが、我々の以上の考証と調査によれば、所謂『坎曼尔詩箋』は一九五九年にミーランから出土したものであるあり得ない。また、それは、一つに張り付けていたために一件の文書であるなど見做すことはできない。その内容は唐代の「坎曼尔」が書いたものではあり得ないのであって、「坎曼尔」というその人物その事実さえも存在し得なかった。我々の調査の過程においては、詩箋の真偽について触れたが、主な回答は以下の二種類の状況に分けられる。詩箋は本物であると信じられるか、この疑問点の一つ一つに対して解釈を試みたということ。疑問点はあるけれども、この文物は確かに存在したものであって、現代人が偽造したものではあり得ないという

こと。新疆自治区博物館の責任者沙比提（ウイグル族）の見解は全く異なるものである。

文書は沙比提が手掛けて展覽会に送られたものであり、文書が展示に出されてからは、郭沫若が文章を発表したが、沙比提は別の角度からこの二つの一級文物について考察している。

中央民族学院の艾買提は詩箋の背面のものはチャガタイ文字であると確証した。そのチャガタイ文字によって、背面に書かれている鮮明な文字の痕跡は、一組（少なくとも七八個はある）の地名であると解読された。これより数年前、沙比提は自治区古籍事務室の主任であった庫爾班外力などの人と、新疆南部に『突厥語大辞典』の作者マハムード・カシユガーリの墓地を調査に行き、カシユガル専区疏附県の烏帕爾村に到着した。沙比提はちょうど『坎曼尔詩箋』の表裏両面の写真を携帯していたが、それが意外な発見に結び付いた。詩箋の背面のチャガタイ文字で書かれた地名は、一つと言わず、全てが烏帕村付近のものであったのである。実地調査によって、これらの地名は全てこの土地で著名な瑪札（マザー・イスラム教の墓地）のもので、墓に埋葬された人はいずれもマハムード・カシユガーリと同時代の人、つま

り十一世紀の喀刺汗朝（カラハン朝）の人士であることが明らかになった。そしてこのことは沙比提をして過去の或る出来事を想起させることになった。

一九五七年から一九五八年にかけて、沙比提は新疆南部で文物の分布調査を行った。当時ともに行った二つの小さな班の内、その一つはちょうど烏帕爾村で仕事をしていたことがあり、正式な作業報告も書かれている。彼らは烏帕爾の古い瑪札の中で、文字が書かれたかなり多くの反古紙⁵⁾を目撃しているが、その中で比較的完全にして古いものを若干選り出してウルムチに持ち帰り、博物館の倉庫に保管させた。沙比提は、所謂「坎曼尔詩箋」は或る人が彼らが烏帕爾の瑪札から持ち帰った旧文書を利用して書いたものである可能性がある、と考えている。

沙比提を含めてウイグル族の学者の中には、チャガタイ文字が書かれたのは、漢文よりも早く、イスラム教はその他の宗教を信仰している民族の文書に対して排斥的な態度をとった、と考えているものもある。もし紙上に先に漢字が書かれているとしたら、二度と文字は書けないのであって、更にはその紙を用いて聖賢の墓の名を書くことなどはできないのである。その他、背面のチャガタイ文字の特長より考察すれば、それらが書かれたのは

十七世紀よりも早いことはあり得ない。地名の語音表記はその上限を証明しているばかりでなく、また、その文法も十七世紀以後になってから現れたものである。その明らかなる証拠としては、瑪札ごとに「布茲勒庫瓦」（聖人）というこの呼称を冠しており、且つ準噶爾（ジュンガル）蒙古の修辭の特長をもつということがある。

二、詩箋の「製造」過程についての分析と調査

詩箋がもし後人が偽造したものであるとすると、いったい誰によって、いかなる時に、そしてどのような背景の下でなされたのであろうか。この問題については我々は『坎曼尔詩箋』の真偽を考察する過程において、已に繰り返し考えてきた。

そこで、我々は新疆地区の偽造文物の状況について専門的に研究した。前世紀の半ばよりこのかた、新疆の文物（とりわけ文書）は世間の人の瞩目するところとなり、「宝探し」は現地住民の一つの主要な副業になった。ほろ儲けができるということ、偽造文物の「生業」は起こるべくして起こったのである。前世紀末、和闐（コータン）ではついに偽造文書の「工場」が出現した。一度始まるや、偽造をするものは本当の文書を種本にして文物を模造したが、これが大いに歓迎されることとなっ

て、ほとんどヨーロッパの最も重要な博物館に収蔵されている。その後彼らは勢いあまって、思いのままにある種の西域の古文字で書かれた文書を「発明」し始めた。

しかもその偽造した字体は十二種にも上り、そのために、英国等の国家におけるこの神秘文書の解読に協力した東方学者は知恵を絞り尽くしたが、ついには手も足もでなかつた。スタインはその『沙埋和闐』（砂に埋もれた和闐）という書のなかで、特別に章を置いて彼と或る重要な文書の偽造者であった阿洪との闘争について紹介している。スタインが決定的な勝利をおさめたために、それ以後の偽造文書の「生業」は振るわなくなつた。しかしながら五六十年代に至ると、各種のルートより収集された西域の文物の中に、依然としてしばしば正真正銘の偽造された古文書が見いだされたものである。

指摘しておかねばならないことは、文物の偽物を作ることは、その根本的な要因を考えると、主に利益を得るため（個人的にもまた名誉を得るため）である。個人の名誉と利益のためでなかつたとしたら、偽物を作ることなどできることであろうか。特定の歴史の時期にあっては、これも全く可能なことではあつた。五六十年代にはこの種の「私心のない」動機⁶という条件が存在していた

のである。

所謂る詩箋は一つに張り付いていて、誤って一件の文書であると見做されていたが、これは全くあり得ない嘘、詩箋に関する一連の嘘の中の最たるものであると我々は已に証明したのであるから、所謂る詩箋を引きはがした一九六二年というのは詩箋の偽物を作ったおおよその時期であろう。

初めて新疆の調査に赴く前に、我々は、詩箋は一九六二年前後に偽造されたものであるというこの一つの仮説について心理的な諮問をおこない、偽作者にとつての六つの絶対に欠かせない条件を設定した。一、六十年代より七十年代の初期に至るまで、新疆博物館で仕事をしてゐること。二、代々に渡つて新疆に住む漢族であり、解放前の新疆の民族関係に対して直観的ではあるが大まかな理解を示し影響も受けたものであること。三、大学程度の教養を身につけたものであること。四、伝統的学問の根底があり、私塾に数年通つたことのあるもの。五、中途から文物考古事業の道に入ったマニアであること。六、博物館に至つた後、境遇が終始悪く、そのまま業績があげられなかったが、業績をあげたいと切望してゐたもの。

この後、我々は第一の条件に適合する関係人物を配列してみた。その資料は間接的に手に入れたものであるが、正確さの点ではいささかの問題もない。我々の選別を経た結果、資料によつて上述の六つの条件に一致したのはただ一人のみであった。即ちLである。唯一修正を少々要する点は、Lの祖先は清朝が新疆に派遣して駐在させた官員であるということであるが、これは完全に漢化された漢軍の旗人に連なる。

この時、諸々の新聞雑誌に書かれた活字の資料を見ること以外に、我々は詩箋に関する如何なる背景をも理解したわけではないが、一度調査を始めてからはほとんど全ての疑問点がLに結び付くのである。これは偶然の一致であろうか。それとも我々の推理が完全に成功したのであろうか。

一九六九年冬の戦略的疎開の前には、ただSとLだけが詩箋というこの二つの文書の存在を知っていた。

一級文物であると確定した時、Lは他にも詩箋があると言ひ出した。

Lは賈応逸らの人を連れ立つてほこりに埋もれて錯雑としていた倉庫の中から詩箋を探し出したのである。

一九八八年の冬にウルムチに調査に赴いた時に、一九

六二年から一九六三年にかけては、Lを下放させる準備をしていたために、その当時Lは気持ちが悪く塞いでいたということ、我々は理解することができた。「文化大革命」以前に、Lは教師として博物館のウイグル族の作業要員に漢字を教えたことがあるが、それゆえLは漢字の書き方の授業をしていた時に、「かなり前のことだが、拜城県に漢族の人が専門的にウイグルの子弟に漢文を教える学校があつて、清朝末期に或るウイグル族の子供が学校に入って漢字を学んでいた。七歳より始めてそのまましっかり勉強を続け、後に専ら一冊の本を書くことに打ち込んだ。」というような話をした、ということも我々は理解できた。さらに、Lもまた口語と文語が入り混じった詩を書くのを好んだのである。我々の調査の対象、その筆頭はLである。しかしウルムチで辛うじて聞き付けたところ、Lは癌にかかり、已に末期であるということだった。それゆえ我々は直接Lと詩箋について話ができたわけではない。詩箋のことが騒ぎになつてからは、Lは如何なる場合にも詩箋について語ることを避けて通つてきたのである。

しかし、我々はやはりLの筆跡をなんとかして目にしようとした。比較に便宜をはかるために、彼が五十六年

代の過渡期に書いた筆跡をわざわざ分析した。が、筆跡より見れば、Lは直接詩箋を書写した人ではなく、彼の字と詩箋とはまるきり異なるものであつた。

そこで、我々はLにはもう一人の「合作者」がいたであろうとさらに推測してみた。関係者の筆跡を比較した後、我々はこの「合作者」とは紛れも無くSであると考えた。

Sは倉庫保管班の責任者である。申し立てによれば、彼が引きはがし、それゆえに詩箋というこの一つの「奇跡」を発見したということである。六十年代の初期、彼とLは集団宿舎に住んで食事をともにし、LはSに文物考古の常識を教えていたのである。

我々が調査中に知つたのは、博物館の古参作業要員であつた呉震、賈応逸などは、詩箋が表向きになつた当初からいち早くその字体がSに甚だ似ていると注意していたということであるが、このことは、所謂詩箋がなぞられたという問題にまで関わってくる。

関係者は、Sが以前に自分で詩箋をなぞつたことがあつたと認めていること、そしてその作は人々が詩箋の筆跡と彼のものが似ていると思つたものであるということ、を、何度も言っている。我々が三度目にSと詩箋につい

て話をした時に、Sも筆者に次のことを教えた。引きはがした後、文字がわりあいにはんやりしているのに気づき、LはSに「すこしなぞってみてくれないか。私は眼が悪いので、はっきり見えない。」と言った。そこで、SはLの具体的な指示にしたがって、はっきりしないところを一度なぞったという。この発言もまた詩箋に関する別の多くの発言と同様に、考えれば考えるほど耐えられないものである。

Lは自分では眼が悪いといい、Sが代わりになぞるようにと望んだが、どこをなぞったのだろうか。それに眼が悪いLに一つ一つ教えてもらわねばならないとしたら、これは道理に合うだろうか。さらに、所謂なぞるということは、当然唐代のウイグル人坎曼尔の筆跡に基づいて新たに上書きをするわけであるが、どうやってなぞったらS本人の字体と変わりなくなってしまうのだろうか。このことは、或る外国の留学生が柳体の「赤色で書かれたお手本」をなぞり、なぞり終わって外国語の文字ができあがると聞くのと同じようである。しかも筆者は詩箋の原物をことのほか子細にこの目で見たことがある。その筆跡は完全に一回限りで書き上げたものであり、如何なるなぞった形跡も決して無かった。

この他にも、詩箋にはなおざりにされている特長がある。二件の文書はいずれも毎行二十字、横に平たく縦にまっすぐで、よく均整がとれており、手本を敷き写したかのようである。しかし、『憶學字』の第一行の「爲人學字不倦疲」については「字」という文字を書き落としていて、一方「字」を「學」と「不」の間に加えてあるから、したがってこの行は実際には十九字になっている。この点については、書いた者が、別人の別の紙に書かれた「詩箋」に依拠して一字も変えずに書き、そしてたとえ字を落としてしまったとしても、むしろ空格のままにして後方の字の順序を変えなかった、ということによってのみ説明がつくものである。これによって書いた者と作者とは必ずしも同一人ではないことが明らかになる。

ここまで分析して来ると、我々の推理は已に調査の段階で完成に近づいている。所謂「坎曼尔詩箋」は実際にはLが書いたものに違いないが、もともとSが烏帕尔より持ち帰った二つの残紙の上に書いたものである。

三、直接証拠の発見

一九九〇年十二月から一九九一年の一月まで、筆者は再びウルムチを訪れた。新たに調査を行う前に、Lが已に前年に他界していたことを知った。この「謎」を後の

人に残したり、歴史の中に留めてしまわないために、人証のない状況下においても、詩箋の真偽をはっきりさせたいが、それには二つの方法があるのみである。一、C-114（放射線炭素）の年代測定をすること。二、筆跡鑑定をすること。もちろん、我々はいまなお人証を頼みとしたい。

Sと長話をした時に、私はできるだけ詳細に関係ある研究と調査について紹介し、筆跡鑑定の準備をすることを隠したりはしなかった。私が上述の内容を話し終わると、Sはついに「詩箋」に関する真相を話し出し、書面の資料としてまとめた。次に、当事者の姓名をやはり隠しながらではあるが、一字も変えずに原文を示す。

新疆自治区博物館が西大橋から現在の所在地に移されてから、L同志は私に詩篇を代筆させたことがある。おおよそ一九六一年から一九六二年上半期の間のこと、Lは一度私に会いにきて、私に少々の詩句を二枚の残紙に書かせた。彼は書きたい内容を別の一枚の紙に書いて私に見せたのである。これを書いてどうしようというのか、私はその事情を知っていたわけではない。書き上げてからほどなく、私は

白詩唐代鈔本について「付載」『坎曼尔詩箋』辨偽

南疆の「社会主義教育」に行ったので、博物館を後にした。二枚の紙がどうして唐代の文物と見做されて北京に送られることになったのか等の状況については、私はそのいきさつをいささかも知らない。おおよそ十年の後、それがなんと「文物」になって、書籍の封面に印刷されるなどとは思ってもよらなかった。彼がその年に詩を書いてみせた紙も保存されてはいない。後の人に引き続き誤って伝えないために、私は上述の状況を楊鎌同志に教えた。所謂「坎曼尔詩箋」は私がLの要求に答えて、事情を知らないまま書いたものである。（署名）

かくして、詩箋に関する全ての疑問点を合理的に説明することができた。この一頁が最後にめくられた時、我々に残されたのはこころゆくまで考えるということである。

四、余論

読者がこれによって容易に思いつく問題は、詩箋というこのような一つの拙劣な偽造品が、どうして二十年もの長い期間、郭沫若などの専門家学者をして本物であると思ひ込ませてきたのだろうかということ、また、この

一切は、誰が責任を負うべきなのかということである。

『坎曼尔詩箋』試探』の中で郭沫若は、所謂坎曼尔が書いた『賣炭翁』と敦煌遺書中の唐人の抄本とを比較校勘して十箇所の異同を校出し、それと同時に、これらの箇所においては坎曼尔が書いた『賣炭翁』が敦煌の唐人の抄本とは全て異なるものの、一方では今本と同じであることを発見している。実際、このことは紛れも無く、所謂「坎曼尔詩箋」は唐代の文書では断じてないということであり、今人の手（五六十年代の中学校の国語の教科書から直接抄出されたもの）から出たものという証拠の一つとなっている。が、郭沫若はどういうわけかこれによって詩箋は「この上ない宝とも言すべき」との結論を出しており、また心から称賛してもいる。

坎曼尔というこの兄弟民族の古人は我々が尊敬するに値する人であり、彼は白居易の進歩的な意義をもつ『賣炭翁』を書き残したばかりでなく、又彼には自分で作ったという極悪な地主をひどく罵った『訴豺狼』もある。この二つのことによれば、どのように言おうとも、彼が進歩的な積極分子にちがひなかつたことは確かである。また、彼のこの種の民族融合の感情も人をしてつよく感動せしむるもので

ある。狭隘な民族主義、或いは大民族主義というものは、彼の心の奥底にあつては、全く跡形もなく消えてしまつていようように見受けられる。

二十年の歳月を経た後に、再びこの政治的激情に満ちた文章を読み返してみると、思わず笑い出さずにはいられない。しかしながらそれはまた私を含めた「文化大革命」を身をもつて体験した各人をして、胸のうちに重苦しい後ろめたさを凝視させるものでもあるのだ。後になつてそれをどのように評価しようとも、その一切は歴史の一部分であるにすぎない。今日では、如何なる個人の責任を今一度追求してみたところで、それは、我々がこのように多くの時間を費やして詩箋の真偽を明白にするという本意からは背離してしまい、この相当厳肅な作業をして歴史茶番劇のカーテンコールという儀式を登場させしめかねない。

『坎曼尔詩箋』の出現と世間の騒動は、それ自体に特異の背景があるものであり、歴史上のその他の偽造品と比較してみても、その幸運と不幸は、現代中国の学術界の幸運と不幸とをそのまま反映している。我々が行つたことは、一つの特定の文書の真偽を明らかにするという作業にすぎないのであつて、それが必要であつた所以は、

やはりそれが一つの時代の終焉と別の一つの全く新しい時代の幕開けとを体現しているからということである。

本稿を執筆する過程で、宿学硯学の先生方が多次にわたって御教授して下さったことに対して、特に感謝の意を表したい。また、筆者と面談をし、このテーマに対してことに注意を払われた師友の皆さんにも心から謝意を表したい。

註

- (1) ソ連側の意見は、一九七二年の或る新聞雑誌に発表されたが、今日では已にその元の出所は明らかにし難い。
- (2) このことは、チャガタイ文字が書かれた後に、紙の一端が裁断され、漢文がさらに書かれた時には、それが裁断されて残った紙幅の上で新たに中央の位置を占めたということを示している。
- (3) ただ「古來漢人爲吾師」という句によれば、これは九世紀初頭の回紇（或いは吐谷渾）人の口より出たものは絶対により得ない。当時の群衆がこのような話を口に出せたとはとても想像し難い。
- (4) 本文中では二人の当事者の名を伏せ、S、Lを以てこれに代えた。しかし彼らに関わりのある全てのことも、同様に全く本当のことである。
- (5) 新疆の古い瑪札には用途不明の反古紙が常に散在しており、筆者は幾度もこれを目撃している。例えば庫車県

白詩唐代鈔本について「付載」「坎曼尔詩箋」辨偽

郊外の黙拉納額什丁（モツラー・ヌールエツディーン）瑪札（即ち「天方列聖」）の或る空き室においては、その地面の至る所にあるのは主にチャガタイ文字で書かれた文書である。

- (6) 我々はSと初めて話をした時のことを思い起こさずにはいられない。Sが倉庫が雑然としていて急いで整頓をすべきであった時のことを語りながら、彼が博物館で仕事をできるようになってからは、「『新疆は祖国にとつて切り離すことのできない一部分である』それは何によって証明されるのか。それは出土文物によってである。」というこのような教育を彼は繰り返し受けたと特に指摘している。

付記 この拙訳は『文学評論』一九九一年第三期所収の楊鎌の『坎曼尔詩箋』辨偽』に依つて行ったものである。

翻訳文の作成に当つては、慶応義塾大学の佐藤一郎名誉教授の御教示をおおいだ。また、考古学の分野については、後藤雅彦氏（国学院大学）、言語学は杉田泰史氏（国士館大学）、仏教は岩城英規氏（東京大学）に有益なご教示を賜った。師友の皆様ここに謝意を表す次第である。